

山内得立著

『人間のポリスの形成』

藤井義夫

「人間はなによりも社會的動物である」とかつていはれた。

人間は決して孤立的存在ではなく、人と人との間柄としての社會的存在に外ならぬ。そしてギリシヤに於ける社會的なるものの原始的形態はアゴラーにはじまる。それは市場であるとともに民衆の集會所であり、ソクラテスとともに我々に親しい名である。それ故に我々は人間のポリスの形成をまづアゴラーの原理から出發せしむべきであらう。

ギリシヤ神話によれば、アゴラーを宰領する神はテミスであつた。彼女はゼウスの娘であり、生れつき好意にみちてゐたといはれる。そこからしてテミスはゼウスの意志を具現し、それを人間に傳へ、さらに人と人とを和合せしむる神である、と規定しうるであらう。テミスは彼女の性質を分有してゐるところの三人の娘——善意の神、エウノミア、正義の神、ディケー、平和の神、エイレーネー——をもつてゐる。そして我々にとつ

てとくに重要なのはディケーである。アリストテレスによれば、*Dike* は *Dike* から來てゐる。即ち正義は分割である。従つてテミスが和合の神であり、ゼウスの意志を人々に託宣するところの *Orakal* の神であるに對して、ディケーは争鬭の神であり、曲直を辨別し混沌に秩序を與へるところの *Orakal* の神である。それ故にまた前者は未來への配慮に、後者は現在の裁斷に關してゐる。かくてこの二つは社會構成の原理となるのである。

ところで正義 (*Dike*) はさらに如何なる規定をもつてあらうか。周知の様に、プラトンは主徳として智慧、勇氣、節制、正義の四つを擧げてゐるが、正義はこれらの諸徳と相並んだ一つの徳であるのではなく、むしろこれらの上に立ち、これらを指導する原理的な徳であり、そして正義の本質は過少と過多との中間にあつてこれらの均等 (*equilibrium*) を形づくることに外ならぬ、といふことが彼の主張の核心である。アリストテレスは「ニコマコス倫理學」に於て、この均等の思想をさらに明確に展開してゐる。まづ正義が過剰なるを除き、それだけ不足せる部分に填補することを意味するときそれは「公正の正義」 (*justitia correctiva*) と呼ばれる。そしてその基礎をなすものは「算術的均等」である。しかし人間の世界は極めて複雑であり、個性と能力と

を異にするものが均等の分け前をもつことは却つて不正義であると考へられるからして、彼は人と物との關係を比例的に均等ならしむるものを配分の正義 (justitia distributiva) として、それを匡正の正義から區別した。その限りに於て配分の正義は幾何學的均等をその根柢としてゐる。(アリストテレスの正義論に於て、以上の外に所謂流通の正義 (justitia commutativa) が存在するか否か、といふ論議多き問題——我國に於ても夙に福田徳三博士によつて取り上げられた著名なる問題——について茲では、それが複雑なる構成からいへば配分的なるものと、またその單純なる關係からいへば匡正的なるものと規を一にするといふ理由からして、それは兩者の結合に過ぎぬ、と解釋されてゐる。)

こゝに我々はアナロゴスが社會の論理といはるべき理由を發見する。アナロゴスの論理は、すでに、「體系と展相」(昭和十二年)に於ても明確に論明されたやうに、そのアナ的性格からして、上への論理であり、空間的統一を求めるところの社會的原理である。そしてカタロゴスがそのかたの性格からして、下への論理であり、時間的發展に従ふところの歴史的原理であるに對峙してゐる。社會は人々の集團であり、それらの異別性を拂拭することなしに、それに秩序と組織とを與へるものがまさ

しくアナロゴスの論理なのである。

ところで正義の社會的表現は就中法の概念に集中する。ギリシヤに於ては法はテスモスとノモスとに區別して用ひられた。テスモスは語源的には決してテミスから導出されたものではないであらう。けれどもそれが君主の意志を一般民衆に告知せしむるものであつたところからしてテスモスに親近なる關係をもつてゐる。之に反してノモスの支配者はダイケーに外ならなかつた。我々はノモスの特質を恐らく次のやうに規定することができるであらう。一、プュシスが自然的、客觀的なるものを意味するに反して、ノモスは人間的、主觀的なるものを意味する。二、ノモスなる言葉が *nomos* (分割する) から來たやうに、配分的なるもの (*lawlike*) に關係をもつのである。三、ノモスはダイケーと同一原理に屬するが、ダイケーは現在の、ノモスは過去の様相に屬してゐる。それは既に與へられたものであり、従つて常に規範的なるものである。この規範性は人間の遍き性情に適合したもので、即ち合宜性 (*temperance*) として規定されることによつて、論理に合一したるもの、即ち合理性に照應するであらう。

このやうに、ノモスは人間の社會的構成の原理となるもので

あるが、我々はこの原理を働かしむる所以のものをエトスに求めねばならぬ。人間のポリスの形成に於て、ノモスはいはゞ理論的なる、しかしエトスは實踐的なる原理である。そしてノモスの中心が正義であつたやうに、エトスのそれは親愛(φιλία)に外ならぬ。さきに述べたやうに、エウノミアは人に好意をもつことであるが、それは單なる心の情態であり、いはゞ「働かざる友情」であつても、未だ親愛ではない。親愛は愛することに於て自ら働くところのものである。エロースもまた愛することとそれ自身の中に生命をもつものであるが、親愛はむしろ愛しそして愛されるところの相互性の中に成立し、かくて人間の和合的關係の地盤となる。しかし親愛に於けるかゝる均等性は、正義に於ける均等性が同量的(μισαρισμός)であつたに對して、同類的(ὁμοιωτικός)といはるべきものである。そしてあたかも正義に於て匡正的なるものと配分的なるものとが存在したやうに、親愛にもまた單に同類的なる人々の間にと同時に、親子、夫婦などの一の他に對する優越なる間柄にも成立せねばならぬ。親愛に於て我々は單なる感情ではなく倫理的なるものに出會ふ。それは我なる我と他なる我とを共に生かしながら同時にこれらを統一するところの人間の協同體の根本原理である。

人間のポリスの形成はつねに人と人との結合による協同體に

於て成就するが、その完成は一すじなる平和の道に於てではなく、却つて相戦ふところのクリシスを通じて達成される。正義はまさしくこのクリシスに於て現はれ、それを通じて人間の結合を支配するものが親愛である。そして相異なるものを相異なるまゝに結合するところの協同體の論理がアナロゴスであるならば、正義と親愛とはそのロゴスのなるそしてパトスのなる二つの方向を表明するものといはねばならぬであらう。

* * *

以上が山内得立博士の新著「人間のポリスの形成」の梗概である。この書は序文にも述べられてゐるやうに、博士の年來の研究對象であるところの「人間の思想の歴史」の一齣をなすものであるが、單獨にこれだけをとつてみても卓れてその存在の理由を主張しうべきものといはねばならぬ。

ギリシヤ思想に關心をもつものにとつて、その生成發展の母胎をなすところのポリスの協同體の本質を闡明すべき必要に迫られてゐること今日に如くものはない。そしてかゝる必要に應ずるものとして、我々はたとへばイエーガーの「バイディア——ギリシヤの人間の形成」(一九三四年)をもつてゐるのであるが、これは文化史的發展を主題としたものであつて、ポリスの人間の構造を哲學的に究明したものではなかつた。山内得立

博士のこの新著はまさしく我々のかゝる要求を高き程度に於て充足せしむるものである。この意味に於てこの書の公刊は我が學界に寄與するところ大なるものがあるであらう。

ひとはこの書に於て論ぜられた種々の概念が文獻學的になほ吟味さるべき多くのものを貽してゐることを非難するかも知れない。またこの書の主題が歴史的にギリシヤの人間のポリス的形成に合致するか否かを問題とするかも知れない。しかしひとはかゝる文獻學的、歴史的の問題を問題とするまへに、この書がそれらを通して開示しようとしてゐる永遠なる哲學的問題に傾聴すべきであらう。それこそまさしく、パウフも言つた様に、眞に歴史的なるものであるからである。

また一つの著作に對する評價はやゝもするとその外形によつて支配せしめられ勝ちである。私はこの書が「教養文庫」の一つとして刊行されたことによつて、ひとがこの書の學的價値を單に教養的なるものに貶斥せしむるであらうことを惧れる。この書はむしろその内容に相應しく、より重厚なる外装の中に盛らるべきであつたであらう。

吹田順助著

『近代獨逸思潮史』

増田四郎

クロップシュトック、ヴィーラントといはずとも、レッシングの例へば『賢者ナータン』をよみ、ゲーテ、シラーの諸作品に親しんで深い感銘を覚えるひとは、恐らくは、かの啓蒙時代以降十九世紀前半にかけての華やかな獨逸文學黃金時代の諸群像を、啻に文學史の問題としてのみならず、ひろく一般思潮史との關聯に於て、くつきりと自分なりに浮彫にしてみたいといふ何らかの欲求を感ずることであらう。否、それほど歴史的な意味にでなくとも、それら群像の諸作品を縫つて、絶えず流れてゐると思はれる一脈の、しかも極めて力強い「ゲルマン的・獨逸的なるもの」とも名づくべき拭ひきれぬ性格を、せめていづれかの角度からでも窺知し、或ひは體得してみたいといふ衝動に驅られるのではなからうか。このことは、特に獨逸思潮にこゝろ惹かるゝひとにとつて切實であるばかりでなく、また南歐乃至は西歐ラテン系諸國の文學・藝術を對比・豫想するほど